

黒石ねふたの伝承にみるコミュニティと子どもの関わり

～美郷保育園の保育活動から捉えたねふたの実践事例～

The Community to Hand down the Traditional Festival KUROISH
– NEPUTA and its Concern about the Children
～The Practice Case of NEPUTA from the Viewpoints of
Nursing Activities at MISATO Nursery School～

大沢 陽子

Yoko OSAWA

青森中央短期大学 幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words ; 黒石ねふた コミュニティ 子ども ねふたづくり

I. はじめに

青森県の夏祭りの代表であるネプタ祭りの歴史は古く、地域によりその形態や運行は異なるが、長い間人々に親しまれ引き継がれてきた。青森市のネプタ祭りは、1980年に国の重要無形文化材に指定され日本の代表的な祭りとして、国内外においても注目され観光化している。しかし、青森ネプタも以前は、人々が楽しむためのネプタとして生活や習慣に根付いた祭りであった。

黒石市は、2014年市制施行60周年を迎え「歴史探訪黒石の夏祭り」（黒石観光協会黒石よされ実行委員会）が発行され『黒石よされ』、『黒石ねふた祭り』の歴史変遷が記されている。黒石のねふた祭りは、ネプタという表記ではないことや弘前のねふたと類似していること、今日においてもその背景には、地域に根差した生活文化的なねふた祭りとしての特色が残されている。そこに参加する地域の子どもたちが町内単位でねふた制作に関わり、囃子の練習・運行に携わる形態が、子供会育成の働きかけも相まって長い間受け継がれてきたことは、コミュニティが大切にされ重要な役割を果たしてきた結果といえる。さらに、市内の各幼稚園や保育園においてもねふた祭りが園行事として位置づけられ保育活動として実践されていることも一要因と捉えることができる。ここでは、ねふた運行参加型を主とする方法ではない、子どもが主体的にねふた制作に関わる活動の展開と保育者の援助、地域とのかかわりを大事にしている保育園の取り組みに注目し、ねふた制作を通して子どもが育つもの、育てられるものに視点を置いたねふたと子どものかかわりを明らかにする。

II. 研究方法

「黒石ねぶた祭りの歴史」については、文献・資料による調査、保育園のねぶた制作活動に関しては保育園長、主任保育士に対し、平成29年1月21日にインタビュー調査を実施した。

本研究は、青森中央短期大学教育開発・研究支援委員会の倫理審査の承認を得たものである。調査への協力依頼文書と口頭で倫理的配慮について説明を行い、後日同意書を受理したことで同意したものとみなした。

III. 黒石ねぶたの歴史

1. ねぶたの呼び方

「津軽ねぶた論攷 黒石《分銅組若者日記》解」によると明確なねぶたという呼び方は記されてなく、豊歳祭りや二星祭り、七夕祭りと記されている。享保7年(1722年)7月に「信寿ねむた流し観覧」とあり、享保11年(1726年)7月には「信寿七夕祭を観覧」とされている。このことから当時は、ねぶた流し、七夕祭と呼んでいたのである。七夕は中国の行事であり、奈良時代に日本に伝わり、七夕を乞巧とも呼んでいる。乞巧とは、裁縫などの技芸が上手になることを願うことでありその後、縫い物だけではなく様々な芸事の上達を願い、この行事を乞巧奠(きっこうでん)と呼んでいる。七夕が乞巧奠であり、人々はこの日にねぶたを出すものであると信じていたようである。(五所川原 平山日記 宝暦6年 1756年)

江戸末期の黒石ねぶたは、旧暦7月1日の新月の暗闇の中、ゆらりゆらりと担がれ6日まで毎晩威勢よく運行されていた。子どもも大勢おり、消防組が取り仕切っていた何人かで担ぐそのねぶたには豊年祭りとか七夕祭り、二星祭りと書かれていた。なぬかび(七日日)の昼には大勢で川に行き、ねぶたと自分の身体をあらう。これは、身の穢れを流す禊でありねぶた燈籠は贖物として考えられた。ねぶたと呼ばれるようになったのは、農作業の妨げになる睡魔ややる気をなくする怠け心などを、川の水に流すねむり流しからきているのではないかとされている。このように独特の形で様々な信仰や言い伝えを背景に伝承されてきたのである。

2. ねぶたの歴史

ねぶたのはじまりは、さだかでないが、文禄2年(1593年)7月、津軽藩祖為信が京都に滞在した際、うら盆会に二間四方の大燈籠を出したことから津軽の大燈籠と評判になったと記されているが、ねぶたの始まりの年代としては明確ではないようである。享保7年(1722年)7月に五代津軽藩主信寿が、ねぶたを見物した記録がある。黒石ねぶたについても「山田家記」(天明6年・1786年)に「七夕祭り、例年の通り賑々しく」とあり、毎年のように賑やかに行われたということから黒石ではかなり以前から、七夕祭りが盛大に行われていたことがわかる。ねぶたが絵に描かれている資料として「子ムタ祭之図」があり四角や長方形の形であったものから次第に変化し作り方に趣向を凝らし、大きさも大型化していく。嘉永5年には、扇を額の上のせた燈籠の絵が残っている。

《イザベラ・ルーシー・バード女史の見たねぶた》

明治11年(1878年)イギリスの旅行家イザベラ・バードの紀行文『日本奥地紀行』に黒石ねぶたの記

述があり、運行の様子が次のように記されている。「私たちはまもなく祭りの行列が進んで来るのを見られる所まで来た。それはとても美しく絵のようであったので、私はそこに一時間ほど立ち尽くした。この行列は、八月の第一週に毎夜七時から十時まで町中を練り歩く。行列は、大きな箱《というよりむしろ金箱》を持って進む。その中には紙片がたくさん入っていて、それには祈願が書かれていると聞いた。毎朝七時に、これが川まで運ばれ、紙片は、川に流される。この行列には人間の高さほどの巨大な太鼓が三つ出る。それは馬の皮がはってあり、面を上に向け、太鼓を叩く人に紐で結びつけてある。そこから小太鼓が三十あってみな休みなくドンドコドンと打ち鳴らされる。どの太鼓も面に巴が描かれている。そこから何百という提灯が運ばれてくる。それはいろいろな長さの長い竿の上の中央の提灯のまわりについて来る。竿の長さが20フィートもあり、提灯自体が6フィートの長さの長方形であり前部と翼部がある。それにはあらゆる種類の奇獣怪獣が極彩色で書かれている。事実それは、提灯というよりむしろ透かし絵である。それを取り囲んでいるのは何百という美しい提灯で、あらゆる種類の珍しい形をしたもの 扇や魚、鳥、凧、太鼓などの透かし絵がある。何百という大人や子どもたちがその後ろに続き、みな円い提灯を手を持っていた。行列に沿った街路の軒端には、片側に巴を描き、反対側には漢字を二つ描いた提灯が列を作ってかけてあった。私はこのように全くお伽話の中に出てくるような光景を今まで見たことがない。提燈の波は揺れながら進み、柔らかい灯火と柔らかい色彩が暗闇の中に高く動き、提燈を持つ人の姿は暗い影の中にかくれている。この祭りは、七夕祭り、あるいは星夕祭りと呼ばれる。しかし、私はそれについて何の知識も得ることができない。伊藤（通訳と案内人）は、その意味は分かっているが説明できない。」（高梨健吉訳引用）と記され、当時も盛んであったな黒石ねぶたの様子が紹介された貴重な史料である。

戦後のねぶたは、夏祭りの行事の中に組み込まれ合同運行となる。昭和30年代は、子どもねぶたの数が多く、31年にはリヤカー等にねぶたを乗せた子ども達で作る子どもねぶたの数が50～60台にものぼる。ねぶたの会期は、新暦の8月1日～7日の会期となりその後、津軽の先陣を切る黒石ねぶた祭りとして7月30日から8月5日に変更され現在に至っている。

3. ねぶたのつくり、囃子

黒石では、古くから人形ねぶたと扇ねぶたの二種類があり共存している。ねぶたの正面に対し背面に描かれている見送りという額絵がつくことが特徴である。扇ねぶたの表面は、鏡絵といい多くは、三国志や水滸伝から取り入れた武者絵が、背面の見送りの絵は美人画が描かれており、表面の豪華絢爛な動の世界に対して、背面は物寂しさを表現した静の世界で対象的である。1965年(昭和40年)位までには、黒石の人形ねぶた本体の作りは骨組みも竹が主流であったものが針金で制作するようになり、扇ねぶたも、外枠に一枚紙で貼るのが正式といわれようになった。

1968年(昭和43年)黒石青年会議所は、子どもねぶたと囃子の統一に力を入れ、黒石らしさを意識した「はやし講習会」が開催され黒石の「すすめ、とまれ、もどり」の基本形が推奨され、3年後には「正調黒石ねぶたばやし」が定められ。さらに保存会を結成し囃子の講習会の継続により多くの後継者を育成している。そして、各町内会中心のねぶたが盛んになり、昭和56年には、過去最高の81台となり黒石ねぶた祭りの記録となっている。ねぶたの各賞の部門には、子どもねぶたもあり、制作後継者の育成を目的とした「前ねぶた賞」や「チャレンジ賞」、「コミュニティ推進賞」の設定もされている。

1985年(昭和60年)には黒石青年会議所30周年記念事業として、子どもたちに夢を、故郷に誇りをという目的で世界一大きいねふたと太鼓が制作され、この太鼓は「黒石もつけ太鼓」と名付けられ運行されている。平成5年には県無形民俗文化財に指定され、ねふた総勢70～80台の出陣で多くの観客を魅了し今日に至っている。

「黒石市市制施行60周年 歴史探訪黒石の夏祭り『黒石ねふたまつり』」(平成26年7月発行・黒石よされ実行委員会)に黒石ねふた祭りの特徴について次のように述べている。『黒石ねふた祭りの美しさは、五段高蘭を特徴とする人形ねふたと大小扇ねふたを共々に運行する合同運行の形態。また、本体の造作だけでなく、曳き手の子ども達とともに連れ添うお母さん達。さらに囃し手のリズムやこれを取り仕切る大人たちが共同で育む絆の姿。これらが「黒石ねふた祭り」であり、子どもたちに伝える美しい伝統の形である』と、歴史と伝統を大切にしている思いが表れている。

IV. 美郷保育園の保育活動から捉えたねふたの実践

平成29年1月21日(土)黒石市美郷保育園において、保育園園長、主任保育士に対して保育園でのねふたの取り組みについてインタビューを実施し、その結果についてまとめる。

質問1. 保育活動にねふた作りを取り入れたのは、いつ頃ですか。

黒石市から移管された平成13年、美郷保育園開園当初から始める。当園の社会福祉法人が運営するN保育園から継承し、現在に至る。

質問2. 保育活動にねふたを取り入れた最初の頃と、近年では内容や方法が変わっていますか。変わっている場合は、どのようなところですか。

変わっていない。役割分担については、大きい扇ねふた制作には年長組(5歳児)、小さい扇ねふたは年中組(4歳児)、年少組3歳児は、各扇の『開き』や『額』の色付けをする。

質問3. ねふた作りの制作過程について教えてください。

①資料収集

子どもたちは、幼い頃からねふたに親しむ環境で育っていることから、ねふたやネプタの写真、新聞、チラシ、パッケージ等についている絵を集めて各自持ち寄る。

②題材の決定

各自が持ち寄った資料や絵本、昔話から、子ども達の話し合いにより題材を決める。

③構図を描く役割を決定

構図を描いてみたいという子どもが担当するが、複数人いる場合は、各自が描いた絵を出し合いオーディションを行いその中から選ばれたものが決定される。

④構図、色彩等の決定

具体的に描かれる人物像、ポーズ、表情、彩色のバランスについてどのように表現するかを話し合う。例えば、迫力ある動作にしたい場合、立位の状態、腕や脚の伸展や屈曲、表情について意見を述べる。実際子ども達同士でモデルをしながら、身体で表現することで作りあげている。

普段あまり発言をしない子がとても積極的に意見を述べる光景もある。園外活動で体験した絵画や作品の鑑賞より是非描きたい事象を選択することもある。平成28年度は、青森県立美術館で開催された棟方志功展から「釈迦十大弟子二菩薩」が送り絵に描かれている。

⑤役割分担 ⑥下絵の完成 ⑦墨絵 ⑧蠟書き ⑨色付け ⑩紙貼りの順に進める

園の夏祭りに披露するため7月に完成。年長組のねぶたは、黒石ねぶた祭りに出陣する〇町内のねぶたの「前ねぶた」として参加することが、子ども達の自慢でありプライドを持っている。

質問4. 保育者はねぶた作りにどのような指導や援助をしていますか。

保育者は、指導するのではなく、子どもたちの主体性を尊重して活動を見守る。子どもたちが活動しやすいように場所や材料を整える。蠟書きする際の蠟は、葬儀屋さんが提供してくれたものを利用し、ねぶたの骨組みは、地域の方の倉庫にあるため5月、ねぶた囃子の練習の音が聞こえる頃、園庭にそれを出しておく。子ども達が考え、子どもたちの力でねぶたづくりが達成できるように環境を整えることに努めている。

質問5. 子どもたちに黒石ねぶたについての説明やお話をされていますか。

黒石ねぶたは、本体が人形ねぶたと扇ねぶたがあり、黒石夏祭りに参加するねぶたの台数がとても多いことを教えている。

質問6. 美郷保育園のねぶた作りの特徴といえる点はどのようなところですか。

子どもの手作りで制作すること。ねぶた作りは、子ども達同士の話し合いからスタートし、一人一人が様々な意見を出し合いじっくり考えること。その中で相手の意見を聞いて尊重しあうこと。同一のものに多数の子どもがやりたいと意思を表明した場合、どのような方法で決定したらよいか方法を探り子ども達で解決する。そのような過程を繰り返しながら最後までやり遂げる。それを保育者は見守っていること。さらに地域の方々も気軽に園やこども達に声掛けしてくれる環境にあること

質問7. 園でのねぶた作りやネブタ祭りは、地域の方々との関わりを持っていますか。持っている場合どのようなことですか。

町内の方々も園児の手作りねぶたをよく理解し、参考になる凧絵や鏡絵を園に持ち込み見せてくれる。逆に町内のねぶた制作の時には保育士たちが紙貼りを手伝うこともあり、互いの協力関係が構築され交流が深まっている。町内で園の子どもねぶたが運行する際に、ねぶた囃子組の方々が囃子の応援をしてくれたり、交通安全協会の方が運行が安全に行われるように誘導してくれる。子どもねぶたは、町内の方たちからも楽しみにされ期待をされている。ねぶた終了時点では、ねぶたを格納する空き倉庫を貸してくれる。地域の方々は、ねぶた以外の園の様々な活動に協力し情報提供もしてくれ、あたたかく子どもたちを見守ってくれるのでありがたい。

質問8. ねぶた祭りで保護者との連携があるとすればどのようなことですか。

子ども達で制作したねぶたの運行に積極的に参加し協力してくれる。園児の保護者でない地域の大人たちも日頃から声をかけてくれ、ねぶた以外の行事や園活動にも協力してくれる。

質問9. ねぶた以外で黒石に伝承されている祭りごとや行事等を園で取り入れていたら教えてください。

日本三大流し踊りの一つといわれる「黒石よされ」は、園の運動会の際、園児、保護者そそ、参加者全員で踊る。近年は、浅瀬石川河川敷きで行われる「ふるさと祭り」ではよさこいを踊り、岩木山お山参詣の和太鼓を年長組が取り組んでいる。黒石市民憲章の前文に「黒石市は、えぞ地であった昔から、水清く人情のあつあつあずましの里として栄え、『米とりんごといで湯』を誇り、『よされ、ねぶた』を愛してきたまちです。……省略」と謳われているように、子どもたちが、黒石をいつまでも好きになって育ててほしいという思いがある。

質問10. ねぶたに関する保育活動を通して子どもたちの思いや感性等に変化がありますか。

子ども達の絵をみる視点に変化を感じている。目が力強いとか、この部分が好きとか、子ども自身が様々な視点で評価し物事をとらえることができるようになったところ。自分が書いた絵に自信が持てるようになり、自分の考えをしっかりと言葉で表現し他者に伝えることができようになった。さらに、子ども達が身近な人達だけでなく、地域の人達からも褒められたいと思う気持ちが存在していること。

質問11. 保育活動でのねぶたづくりを通して子どもたちのどのような面を育てたいと考えていますか。

子ども達みんなで作り上げることから協力することの大切さを育てたい。ねぶた作りを通して自信が持てるようになり、さらに向上心を高め、積極的に行動できる力と感性を豊かに育てたい。

質問12. 卒園後の子ども達の黒石ねぶたのかかわりについて教えてください。

美郷保育園を卒園した子どもたちは、同町内の〇小学校に入学する。多くの子ども達は、ねぶた囃子講習会に参加し、ねぶた囃子を覚える。園でのねぶたが完成した頃、笛や手振り鉦を持って小学生が園に駆けつける。自然なかかわりが出来き、小学校の先生方も見守ってくれる。

質問13. 「青森ネブタ」や「弘前ねぶた」とも異なる「黒石ねぶた」の魅力または、自慢できる所はどのようなところにあると思いますか。

子どもを中心に、子どもを大切にしているねぶたであり、大人が支え、支援している。黒石ねぶた祭りでの運行は、ねぶたを引くのも子ども、笛を吹くのも子ども、太鼓を叩くのもほとんどが子ども達である。身近なねぶたのかかわりが伝統を育てている。



美郷保育園園児制作

扇ねぶた 大「走れ志功の馬」(平成28年)

扇ねぶた 小「桃太郎」



送り絵「釈迦十大弟子二菩薩善」



桃太郎の戦い (平成26年)



送り絵

V.まとめ・考察

ねぶた祭りにあたる最初の祭りが、七夕祭りと呼ばれるものであり、長い間独特の信仰や言い伝えを背景に伝承され、つくりも四角や長方形のものから扇の形や人形、囃子のリズムやねぶたの歌まで変化を繰り返しながら、現在の黒石ねぶたに辿ることがわかる。

ねぶたを見物したイザベラ・バード女史はねぶたの行列を、お伽話の中に出てくるような光景と捉

え驚きと絶賛をしている。「行列に沿った街路の軒端には、片側に巴を描き、反対側に漢字を二つかけた提灯が列を作ってかけてあった。」ということから、これが、現在も伝統的建築物の「こみせ」の軒下に連なる小学生の作った四角形の灯籠が、その名残りなのかと推察する。イザベラ・バードは、北海道の平取りを目指して旅する途中、羽州街道にある弘前を通らず、大鰐・鯖石街道から黒石に入ったために、偶然にもねぶたと出会い、貴重な記録を残したからこそ当時の七夕祭(ねぶた祭り)の状況や人々の裊々、祈願の様子を理解することができる。

昭和40年頃からは黒石青年会議所を中心に「黒石らしさ」を意識し、子どもねぶたと囃子の統一に努め、「正調黒石ねぶたばやし」を定め、講習会や保存会結成など後継者育成に尽力してきた。ねぶたの台数が多いのは、町内会というコミュニティ単位でのねぶた祭りであり、子どもの頃から囃子を覚え、紙はりや、蠟付けを手伝う環境の中にいたからこそ自分たちのねぶたという帰属意識が高まり、共に大人も後継者育成に努めなければならないという意識も相まって、コミュニティねぶたが発展したのではないかと考える。

市内の小学5年生A君が、2歳の時、両親が撮影した動画を見てねぶた絵に興味を持ち、ある絵師の作品の力強さに惹かれたことがきっかけで、ねぶた絵師になる腕を磨いている。また、市内ねぶた愛好者の会が、子どもたちにねぶたを好きになってもらおうと市内すべての保育園・幼稚園に順次、ねぶた絵を寄贈している。今回、A君の手伝ったねぶた絵をA君の卒園した保育園に送ったことで大きな喜びとなっている。(東奥日報掲載28.12.31より)

黒石市内の保育園・幼稚園では、ほとんどがねぶた祭りの行事を実施している。インタビュー結果からもわかるように、美郷保育園の保育活動でのねぶたづくりは、子ども達が主体的にねぶたづくりを実践している点や地域社会との協力の関係性がうまく出来ているケースである。主体性を発揮しながら活動できていることは、これまでの保育園での遊びや生活を通して多様な体験の積み重ねをしてきた結果から、子ども達同士で考え、判断し、納得して、制作することができたのではないか。それには、保育者が日々の保育の中で、子ども一人一人を理解し、共有し、見守ることで子ども達が安心して伸び伸びと活動できる環境を作り上げていることにある。子ども達は園や地域社会の環境を十分使いこなしながら自らの力を発揮している。幼稚園教育要領の中で行事の指導について、「指導に当たっては幼児が行事に期待感を持ち主体的に取り組んで、喜びや感動、さらに達成感を味わうことができるように配慮する必要がある。」「家庭や地域社会で行われる行事があることにも留意し、地域社会や家庭との連携の下で、幼児の生活を変化と潤いのあるものとするのが大切である。」と述べられているように美郷保育園での地域社会との連携はその機能が十分に果たされていると見てよい。

これまで、黒石には歴史あるたくさんの行事や祭りが受け継がれてきた。人口減少が進む中、郷土の祭りである黒石ねぶた祭りが、黒石らしさを誇示しながら子どもたちにしっかりと受け継がれていくことを期待する。

参考文献

1. 津軽ねふた論攷 黒石 《分銅組若者日記》解 笹森建英編者 1995年
2. 歴史探訪 黒石の夏祭り『黒石ねふた祭り』文責「黒石ねふた祭り保存会」2014年
3. 第9回羽州街道交流会 黒石大会開催記念誌「イザベラバードと黒石」2013年 黒石市発行
4. 「わたしたちの黒石」第3集 黒石の民族行事やお祭り 黒石市民財団発行2003年
5. 黒石市50年の歩み－市制施行50周年記念誌 黒石市発行2004年
6. 2013年 青森学術文化振興財団事業報告書
日常文化としての「青森ねふたまつり」青森大学社会学部 佐々木研究室
7. 黒石城下誌 藩祖津軽信英公分知350年記念誌編集委員会 2008年
8. 保育所保育指針の改定でめざしていること～就学前の保育を担う保育者養成の今後の方向性を考える～ 資料編(幼稚園教育要領関係)社団法人全国保育士養成協議会 現代保育研究所 2008年
9. 幼稚園教育要領解説 文部科学省2008年
10. 東奥日報28.12.31朝刊「描くねふたと大きな夢」